

アリアと呼ばれるエクソシストは、文字どおり言葉によって「魔」物と戦います。言葉に力があるという信仰は世界中に見られ、仏教の真言（マントラ）とか神道の言霊信仰もそれに入ります。様々な形の呪術（魔術）においても、呪文は重要な要素のひとつとされています。魔術師のハリー・ポッターも、ラテン語の呪文を用います。ヘブライ語聖書の中には、讃美歌の力で戦争するシーンまで出てきます。とくに古代の人々は、言葉の力、とくに実際に音として発話される言葉に力を認めていたことがわかります。

さて『青エク』のアリアは、祝詞で戦うこともあります。頻出するのはヨハネによる福音書の朗詠によって戦うシーンです。ヨハネによる福音書は最初から言葉の力を語っていますから、不思議ではないでしょう。今日の聖書箇所は雑駁に言いなおすと、神＝言＝命＝光＝イエス・キリスト、のようになります。創世記のはじめにおいて神が「光よ、あれ」と言うと、光が存在しはじめます。「遂行的発話」と呼ばれる事象です。普通は「パンよ、あれ」などと人が言ってみてもパンが出てくるはずがないのですが、全能の神の発話行為は、それによって無から有を生じる力があるという考え方です。その神の特別な力に与るといえるのでしょうか、『青エク』のエクソシストはヨハネによる福音書の言葉をことのほか重用しています。彼らはなぜか新約聖書が書かれたギリシア語でなく日本語（文語訳）でこの福音書を丸暗記しています。武器として使用するつもりなら当然かもしれません。正しく発話しなければ、効果がなくなってしまいますから。

しかし、日本語訳のヨハネに力があるならば、それはもはや単なる呪文ではありえません。音の並びにではなく、言葉の意味に力があるということを示しています。いったい何が、ヨハネによる福音書の意味内容に力を与えるのでしょうか。考えてみる価値があると思います。

【聖歌隊メンバーの募集】

大学礼拝では、学生・教職員の有志による聖歌隊が合唱をします。どなたでも参加できます。毎週礼拝後にオルガン前で練習をしますので、歌ってみたい人はオルガン前に集合してください。聖歌隊のメンバーには、クリスマス・コンサートのハレルヤ・コーラスも歌っていただきます。

【次回の大学礼拝】2017年11月14日（火）10時40分～

奨励担当は小林昭博先生（キリスト教応用倫理学研究室准教授）です。

【前回の大学礼拝】2017年10月31日

学生 381名 教職員ほか 11名 合計 392名

【大学礼拝週報】2017年度第22号（後学期第7号）

2017年11月7日（火）午前10時40分

酪農学園大学 黒澤記念講堂

《大学礼拝》

司 式 高橋優子（キリスト教学教員）
奏 楽 佐藤理恵（野幌教会会員）
讃美指導 相原晴伴（循環農学類教員）

前 奏 「我らみなひとりの神を信ず」（J. C. バッハ作曲）
讃美歌 讃美歌 546番（聖なるかな）
聖 書 ヨハネによる福音書1章1-5節
祈 り
さんび 酪農学園大学聖歌隊
奨 励 「『青の祓魔師』と言葉の力」
高橋優子（獣医学類獣医倫理学研究室准教授）
報 告
讃美歌 讃美歌 539番（あめつちこぞりて）
後 奏 「神のみむねは常に行なわれ」
(グループナー作曲)

【本日の聖書】ヨハネによる福音書1章1-5節

初めに言があった。言は神とともにあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は神の言によって成った。言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内には命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

【奨励者からのメッセージ】

キリスト教学の授業を担当していると、毎年必ず受ける質問がいくつかあります。そのひとつが「エクソシストって本当にいるんですか？」というものです。映画やマンガによく登場するせいか、コンスタントに質問されます。カトリック教会には、エクソシストの役割を果たす聖職者が存在するようですが、エクソシズム（悪魔祓い）はキリスト教会の中心的な機能ではなく、周縁的な機能と考えるべきでしょう。

諸宗教における祓魔には、いろいろなカテゴリー分けが可能です。今日扱う『青の祓魔師（エクソシスト）』という作品によると、5つの方法があるといわれています。その中でも興味をひくのは「アリア」というものです。